

山崎努教授のご退職にあたって

法学部長 酒井 正文

山崎努先生は、本学ご在職の10年間、変わらぬ情熱と実行力をもって、草創期の大学を支えて下さいました。職場を同じくさせていただいた後輩として、懇切丁寧なご指導と温かいご鞭撻をいただき感謝に堪えません。

山崎先生は、昭和5年6月15日のお生まれです。昭和29年3月に慶應義塾大学文学部英文学科を卒業、さらに同大学院文学研究科英文学専攻修士課程を修了されて、慶應義塾高校で教鞭を執られたあと慶應義塾大学法学部専任講師に就任、助教授を経て、昭和50年4月教授となりました。同大学の外国語学校長、慶應義塾中等部長（中学校長）等を兼務されるなど、専門の英語学の研究と共に、長きに亘って英語教育を実践され、同大学を定年退職されると同時に、平成8年4月、本学にご赴任いただきました。先生の大学英語教育のキャリアは、前任校と本学を合わせますと実に四十年を超えるものです。

山崎先生には、本学開学準備の段階から、英語教育の指針や英語の運用能力の育成に重点をおいたビジョン、具体的方法等々にわたり、様々なご助言をいただきました。先生は、ご自身が関わられた慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの新しいスタイルの英語教育の経験を踏まえて、実に熟っぽくビジョンを語られました。先生の素晴らしいところは、常に的確な現状分析と将来の方向性を見据えた具体的な対策や建設的提案をお示し下さることでした。お陰様で、大学設置審査の際のヒアリングでは、私どもは堂々と英語教育を説明することができました。

このような先生の姿勢は、開学後の大学運営面でも遺憾なく発揮され、本学の屋台骨を支えてこられました。つねに情熱をもって、本学がこれからの大学としてどのように進むべきか、どのようにしたら具体的に実現可能なのか、本当に真摯に取り組んで下さいました。抽象論はありません。つねに若々しいエネルギーで後輩教員を引っ張って下さいました。若い大学の若いスタッフを育てようという情熱が現れているようです。

山崎先生には、実に多くの学内役職をお務めいただきました。教務部長として連続4年、入試委員長2回、広報委員長2回など常置委員会の責任者や、将来構想委員会などアドホックな委員会等々でのリーダー。こうしたお仕事は、教務、入試、広報に集約できるものであり、先生は常に前向きでした。

将来の入試状況を見据えて、平成12年から導入した AO 入試は、今の本学の入学者選抜の重要な柱となっていますが、これは山崎先生の見識から生まれたものと言っても良いでしょう。いま全国の大学で普及したこの方式は、当時はさほど一般的ではありませんでした。先生は、前任校の経験を踏まえ、また高校教育の経験者の意見にも十分に耳を傾け、自ら先頭に立って、長時間のスタッフ会議を主宰して立案され実行に移されました。先生の見識と実行力をよく現すものと思います。

平成13年から14年に亘って設けられた将来構想委員会は、先生が熱心に取り組みられたものの一つでした。今では語り草となっていますが、平成13年の夏休み中、連続3日間、午前から夕方にかけて、延べ約20時間、様々な課題を集中的に議論し、その結果が現在の教務・学生指導面に反映されて様々な改革を生んだことは、印象深いものがあります。平成14年度から始まった FOC や、学生による授業アンケート、公欠制度、オフィスアワーなどもここから生まれたものでした。先生はこの会議で終始リーダーシップを発揮され、また教務部長としてそれらを実行に移されたわけです。そのほか、平成14年11月から16年3月まで行われたカリキュラムの検討、法科大学院進学支援構想、さらには英語科が実施しているカナダ英語研修なども先生のアイデアと見識が発揮されたものでした。

先生は、学生の課外活動の振興にも大きく貢献されました。創部間もない頃、部員も僅か、ないない尽くしであった硬式野球部が今日の強力な姿に成長するには、野球部長としての山崎先生の情熱と薫陶なくしてはあり得なかったことと思います。部長として公式試合では常にベンチに入り、苦境の時も選手を励まし、ここぞと言う場面ではすかさず「メイク・チャンス」と檄を飛ばす。勝って喜び、負けて励まし、いつもチームと帯同されたと聞いております。草ぼうぼうのグラウンド、ろくに用具もない時代から、学生スポーツはかくあるべし、文武両道をめざせと野球部を手塩にかけて育ててこられたと思います。先生が、東映フライヤーズ以来の日本ハムファンと伺って、本当に野球がお好きなのだと思感しています。

そんな先生も、一昨年一時、奥様にご病気になられ、端から見てもご家族思いの先生のご心配の様子が察せられました。しかし、今は快方に向かわれているようで、先生と子ども何よりのこととご同慶の至りです。

定めとはいえ、山崎先生が本学を去られるのは、誠にお名残惜しい限りです。先生の本学への多大なご貢献に感謝し、ご退職後のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。